



おしえの花束

雲晴

お盆号

「雲晴」第十五号

平成二十七年七月一日発行

貞林院瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六一番五

電話(〇三)三六二七―三四一五

FAX(〇三)五六九九―五九一五



### わが子を修行の旅へ送る

親にとって子どもが成長していく姿を見ることほどの喜びはほかにないと思います。子どもが大きくなっていく様をじっと見守っている……。『親』という漢字は、そんな思いをそのまま表してつくられていますね。親という字を分解すると、『木の上に立って見る』ということになります。何を見ているのか……。申すまでもなく、子どもの帰ります。まだかまだかと無事を祈りながら、とうとう木の上に登ってまで待っている親の姿がこの一字に表れています。

木の上に登ってまで待つこの親は、どんな

親なのでしょう。過保護や愛情過多のお父さんお母さんでしょうか。いいえ違います。この親は、子どもを厳しい修行の旅へ出したお父さんお母さんなのです。まだまだ幼くて心配で心配で仕方がないけれど、心を鬼にして修行の旅へ出した親が、無事に帰ってこいと一心に祈りつづける姿、それが『親』という字なのです。

お父さん、お母さん、どうぞお子さんを修行の旅へ送ってください。

夏休みの間、中学一年生の娘を特別養護老人ホームのお手伝いとして送り込んだお父さんがあります。少女は寝たきりのご老人のお世話を手伝いながら、厳しい人間の生涯を見て帰ってきました。

経済的に不自由はないけれど労働を学ばせるために、高校生になった息子を新聞配達の仕事につかせたお母さんがいます。彼は、早朝から働いている人々がこんなにたくさんいるのだということを知って、世の中の厳しさを認識したとのことです。

わが子を修行の旅へ送った親はつらいものです。親も共に修行をするのです。あなたのお子さんも修行の旅へ送ってみてはいかがでしょう。



昨年十二月に還暦も過ぎたことだし健康診断でも受けてみようかと初めて大腸カメラという検査を受けました。何と結果は早期の癌が見つかるというとても新年を明るく迎えられるもの

### ●「阿弥陀さまに 護られている」●

ではありませんでした。今年の二月に内視鏡で切除したものの取りきれず、五月に「がん研有明病院」にて腹腔鏡下手術を行い、六月上旬に無事退院することができました。この病気は早期

貞林院瑞正寺住職 林 清方

病気を抱えた方々の不安や苦しみというものを理解できたことは大きな収穫だったと思っています。私は十二年前より仏教情報センターという宗派を越えて活動している団体

に在籍しており、ここでは僧侶たちがボランティアで「仏教テレホン相談」を行っています。仏事の相談は勿論ですが、近年は特に心の相談や病気で働けない、家から出られないなどの相談も数多くあります。これまで健康に過信していた私は恥ずかしながらどこか他人事のような自分がそこにいたように思います。これからはより真摯に相談者に向き合い、最後は必ず阿弥陀さまが護って下さるということを伝えていきたいと思っています。  
如来大慈悲 哀愍護念 合掌十念



## 民話の小箱 (山形県)

### 娘のお百夜まいり ● おしろおとん



昔々、ある村の寺はたいへんよくきく魔除け(まよけ)のおふだをくれる事で知られており、遠くからも多くの人がおとずれました。

ある夏の夕ぐれどき、一人のきれいな女の人が寺の門をたたきました。

「魔除けのおふだをもらいにまいりました。どうぞ、一枚わけてください」

ですが、あいにくとその晩は和尚

さんが町に出かけていたので、寺の小僧は気の毒に思いましたが、明日の晩にまた来るようにと帰ってもらいました。  
さて、和尚さんが帰って来て小僧からその話をきき、  
(そんなに美しい女が、この村にいたのかな?)  
と、明日の晩を楽しみに、ふとんに入りました。

その夜のこと、和尚さんの夢の中に本堂の仏さまが現われて、  
「おふだをもらいに来る娘は、和尚を食べに来た裏山にすむバケモノじや。百夜通わせて弱らせてから、おふだをくれてやるとよい」  
と、言ったのです。  
夕方になると、昨日の美しい女がやって来ました。  
和尚さまのおふだを、分けて下さい」  
和尚さんが門のすきまからのぞいて見ると、今までみた事もないほど美しい娘でした。  
和尚さんはうっかり門を開けそう

## 一口法話



### 「知る」のしんじゆ

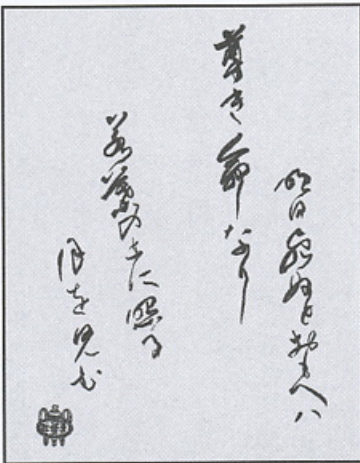
ある時、お釈迦様は「悪いと知って、悪いことをすると、悪いとは知らずに、悪いことをするのは、どちらの罪が重いか？」とお弟子達に尋ねられました。お弟子達は「悪いことを悪いと知らずにするのは、仕方のないこと。しかし、悪いと知りながらするのは、いけないこと。故に、その罪は重たいと思います。」と答えました。

お釈迦様は再び、「ここに、焼火ばしがあるとする。焼火ばしだと知ってつかむのと、そうとは知らずにつかむのとでは、どちらが大やけどをするであろうか。」とお尋ねなさいました。

お弟子達は、「それが焼火ばしだと知ってつかむ者は、十分な注意を払っているから、できるならつかまいません。従って、やけども軽くて済みます。しかし、焼火ばしだと知らずにつかんだ者は、大きなやけどをするにちがいありません。」と答えました。  
要は、「知る」ということが大切です。



# 誘いの書へ



「明日死ぬと思えば尊き命なり  
若葉の上に照る月を見む」

故林 錦洞書

貞林院瑞正寺 住職 林 清方



になりましたが、仏さまの言葉を思  
い出していいました。  
「すまぬが、わしのふだは貴重な物  
お前さまには百夜の願をかけねば、  
やるわけにはいかんぞ」  
すると娘は、悲しそうな顔をして  
帰って行きました。  
美しい娘はそれから毎日夕方にな  
ると、山門まで願をかけに訪ねて来

ました。  
月日が経ち、美しい娘は和尚さん  
がかわいそうになるほど弱つてきま  
した。  
いよいよ百日目になりました。  
和尚さんと小僧は悪魔退散（あく  
またいさん）のおふだを山門のあち  
こちにはると、本道でお経を読み始  
めました。

山門にやって来た娘はおふだを見る  
とブルブルとふるえだし、たちまち  
まつ黒なバケモノのすがたになつて  
寺の中に入ってきたのです。

その時、天から一条の光が境内の  
池に差し込むと、水しぶきをあげて  
竜がとび出して、バケモノと、とつ  
くみ合いの戦いを始めたのです。

たいへん力の強いバケモノでした  
が、お百夜まいりで弱つていたので、  
最後には竜にたおされて池にひき込  
まれてしまいました。

その事があつてから、この寺を竜  
徳寺（りゅうとくじ）と呼ぶようにな  
つたのです。 おしまい

行草書で書かれたこの作品は海

軍大尉山下久夫氏の辞世の句です。  
先代錦洞とは第十四期海軍飛行予  
備学生の同期であり、同じ航空隊  
で寝食を共にした同期の桜です。

山下大尉は昭和二十年に二十三歳  
の若さで南西諸島において特攻戦  
死されておりす。出撃数日前に

詠まれたこの辞世からは「明日は  
亡き命ながら今この一刻を尊く生  
きんとし、月明かりに照らし出さ

れる名もなき雑草の新しい緑に我

亡き後も、なお緑鮮やかに生え伸

びるであろう小さな命に思いを託  
す」という心情が読み取れます。  
これ正しく仏教的死生観と言える  
でしょう。また山下大尉は幼少よ

り父母によってお念仏の教えを継  
られていたことから、遺書には次  
のような内容が書かれています。

「御母上様、お念仏を申してお  
別れます。お念仏は母上と思つ  
て参つた私、御母上も久夫のこと

を思ひくださるとき、お唱え下さ

お念仏のみ教えは、まず、自分自身を  
みつめてみる。そして自分の人柄を深  
く知ることからはじまります。  
法然上人が「念仏を行じて、撰取の  
光に照らされんと思し食すべし」と仰  
つておられるように、お念仏を申し、  
阿弥陀様のみ光に照らされ、自分自身  
の本当の姿に気づかさせていただき、  
常に懺悔の生活を心がけたいものであ  
ります。



（総本山知恩院布教師会ホームページより）

い。皆様に宜しく、南無阿弥陀仏」

今年終戦から七十年を迎えます  
が、戦後の経済成長と繁栄の代償  
として日本人の大事な心が失われ  
てきたように感じます。祖国の栄

光を信じ、自らが犠牲となり南無  
阿弥陀仏と称え散華した山下大尉  
の心に対し、今私たちは胸を張つ

て恥ずかしくない日本を築いてき  
たと言えるでしょうか。戦後七十

年という節目を迎え、今一度襟を  
正すべき時が来ていると思ひます。



## 七月・八月のお盆法要

本年のお盆法要は次のとおりです。

毎年お参り頂いている月のお盆法要にそれぞれご来山下さい。

### ○七月お盆法要

七月十二日（日）午後二時より

### ○八月お盆法要

八月十三日（木）午後三時より

八月のお盆は毎年お棚経参りにお伺いしております。

本年の地区は地元の大下と仲町にお伺いします。

なお新盆でお棚経をご希望の方は早めに寺までご連絡下さい。

## 大本山増上寺御忌大会

### 日中法要を無事円成

去る四月七日に行われました御忌日中法要はあいにくのお天気ではありましたが、お蔭さまで盛大に無事円成することができました。当山でも団参を募集したところ、多数の皆様にご参加を頂き有難うございました。

当山住職も協導師として法要に随喜することができ、先代七回忌、東日本大震災物故者、戦後七十年の戦没者等それぞれのご回向ができましたことは大変有難いことと感謝しております。



「増上寺大殿にて(左脇導師が住職)」

## 筑波海軍航空隊記念館

### 裏千家献茶式に参加

本年三月二十五日に茨城県笠間市にある筑波海軍航空隊記念館での裏千家献茶式に家内と共に参加しました。

終戦七十周年を記念して英霊に対し裏千家元家元千玄室大宗匠が献茶を行いました。千氏は第十四期海軍飛行予備学生で先代錦洞とは同期で深い親交がありました。今号「書への誘い」でもふれましたが、学業半ばで徴兵され二十代前半の若さで戦死していった同期の桜への思いは並々ならぬものがあるように感じました。

献茶式終了後、水戸プラザホテルに



「十四期のお仲間と(後列中央が千氏)」

て懇親会の前に千氏からの講演がありました。会場には裏千家茨城支部会員の皆様約五百名が参加しておりましたが、海軍十四期関係の席は千氏のすぐ隣のテーブルで、このようなところにも同期に対する思いが感じられた次第です。

講演の内容はもちろん「茶道のころ」についてでしたが、大半は海軍時代の訓練や仲間との思い出でした。

「平和への誓いと共に多くの犠牲によって今日の日本があることを忘れてはいけない」という千氏のお言葉が大変印象的でした。

### ◇これも仏教用語なの？◇

#### 「ウロウロ」

「道に迷ってウロウロする」などと使われるこの言葉は仏教語の「有漏」からきています。「有漏」とは漏れるものがあるという意味で、私たちが漏れ出るさまざまな心の汚れつまり煩惱のことです。煩惱が溢れ出てさまよう有様がまさに「有漏有漏」という訳です。「有漏」の反対が「無漏」、汚れや煩惱が消された状態で悟りの世界です。

私たちは無意識に有漏の行為をしている訳で、このことに気づき阿弥陀さまの「無漏」のお心に少しでも近づけるようお念仏をお称えしましょう。